

# ○峰印香竈葡萄酒

ばち印



**峰印香竈葡萄酒**

(香竈葡萄酒は多量の滋養分を含有し飲で其味の佳美を覺へ之れを日常の飲料とせば氣血の循環を能くし精神を活潑にし身軀健康に偉大の裨益を與ふる内外無比の飲料なり)

(香竈葡萄酒は悪疫其他の病因を排除し殊に病後の恢復期に特効あり故に強壯者病弱者を問はず常に欠く可からざる内外無比の飲料なり)

(香竈葡萄酒は内外の博覽會に於て無上の名譽ある數多の賞牌を受領し其名聲天下に隠れなく品質の純良なる實に内外無比の飲料なり)

**峰印香竈葡萄酒**

(香竈葡萄酒の販路は頗る廣くして内地は如何なる山間僻地にも普及し海外にては支那、朝鮮、印度地方及び南洋諸島にも販賣店あり)

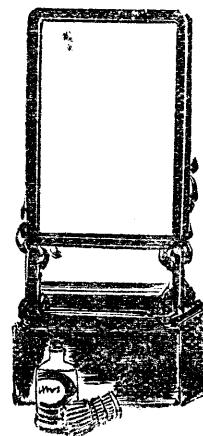
賣捌元

東京市日本橋區本町二丁目九番地

洋酒問屋 近藤利兵衛

## 文藝俱樂部 第二卷第十一編

蜜  
粉



(二)

小栗風葉

留湯一切御斷申候、小町湯の夕暮の門を忙しげに出行く女あり。艶やかなる髪の濃く見事なるを、小さき島田齧の密に娘裝、紫絹の半襟に縞縫子の帶、良古りたる縮緬の帶揚の飛々ながら紅の入りたる疎毛三本格子の黄も濁れる八丈の書生羽織を裾長に着たる、年に比べていづれか若やかならぬはなし。見たる所二十五六の秋も稍深く、水涸に闊れし朝顔も有繫に麗しきは曉の濡色、長湯に熱せし顔の瑩々と露の滴る如く、目鼻立揃いて、生際良亂れたれども、書いたるやうの三日月の眉も捨てたものならぬ容貌。藝者にては固より無く、茶屋女にしても野夫なり。矢場女か、月縛の妻か、此年齒にして此扮裝、よもや堅氣にはあるまじ。傍目も振らぬ急足に裾も嗣々と、そんじよ其所の電信柱に附きて曲らひとする時、お桂、長いではないか、と擦ちがひするこゑか、争はれぬは同じ胎より梅と杏の容貌肖たれど、身装は太くも變胡麻柄の丈短く、襟の縫れたる綿結城の拾羽織を着て、松坂縞の布子に、

角帶、前垂懸の飽まで實体なり。あら、兄様もお湯に?と訊ねるを、内には小僧一人店番の不用心なれば、蚤く歸らぬか、と言捨に急ぎて是も小町湯に入りぬ。  
 折から夕飯時の少時客の絶間、男湯は我獨占の湯槽に踏反返りて、何も謂はれぬ心地、南無阿彌陀佛と燐德利を浸けたるやうに、身動もせで沈める隣の女湯には、前より一人掛けの鏡舌續けにて、何と御内義様、今歸りました娘は如何で御在んす。最う彼是三十にもなりませうがとあれば、彼是どころか、速うに二十で御在んしよ、と痛走りたる聲の早口に、彼は銀杏屋の萬年娘とて名代な者。眞の事、私は那銀杏屋が未だ芝に居たのを存じて在りますが、其頃最う好い娘盛。それから麻布、靈岸島、麴町、兩國と經歷つて、今の天神前に煙草店を出してからも彼是一年近く、毎も赤々と九谷焼の化物のやうな裝して、工手間の懸つた漆泥細工で節分の豆數を隠さうとしても、隠されぬ寄る年波、傍へ寄つて見ますると、小皺の間へ溜つた白粉の黒く染着いて、手垢の附いた白縮纏見るやうな、と笑へば此方も笑ひて、左も右も那年齒で、娘姿も異變なものと皆まで云はせず、其は娘様が見慣れぬ故、大神宮様の御國にては些も稀しう御在んせぬ。其證據には三十振袖、四十島田と伊勢音頭にも御在りまする、と是で一塵洒落て退けたる意か、又も一度に高笑。

前にも、妹は大肌脱の夕化粧に餘念は無かりけり。  
 梅は老樹も花を忘れず、幾歳になるも女は修飾、鏡と擦は一生捨てられぬものながら、最早寐るばかりなる身に然りとは無用の化粧三昧、懲ればこそ、仇も怨も無き他にまで彼是の沙汰もせらるゝなれ。姿を資本の賣

(二)  
 破銅にも綴蓋とやら、況て容色十人並に勝れて、春は這一枝に騒がれし花も、やうやく散方の三十近くまで定まる縁無くて、夏もはや實を結ぶべし頃を仍獨身の徒臥、女の身にしては命も縮むばかりの憂目なるべし。固より始小姑に不満は謂はず、唯假合はしき縁なればと苛つにつけ、賣物の花やかに粧り立て、年齒よりは五歳六歳、若いと云はるゝを着物一枚出来たより嬉しく、今年一十六と云ふに厚化粧の島田畠、日髪、日風呂、寢白粉、何のく好で爲るにはあらず、年齒ほどに扮れば一度目か、と二の足踏まる、が口惜ければなり。

其を承知の兄までが不便と思つてはくれず、然りとは怨言らしい事言はる、からには、然らでも煩き世間の蔭言、然こそは口に税の出ぬまゝに、萬年新造の、人魚娘の、と思も怨も無き者の悪口も愁し。左右は此姿だに世に曝さねば、口惜き沙汰も爲られて済む事なりと、それよりお桂は晝を隠れて薄暗き奥の一間に垂籠め、人目を恥ぢて店にも出でず。風邪氣にも缺かず、湯にさへ弗と行かずなりて、臺所事の外は一日を唯鬱々と暮らせば、生得の蓮葉も遼に陰氣なる吐息の外は、物云ふでもなく、日増に顔の光澤失せて、姿次第に羸れ行き

けり。

病めるにもあらねば、枕に就くにはあらず。設令又僅に懶ましき所あるにもせよ、此切迫りたる師走半の忙しさに、我のみ春の來れるやうに樂寢もならねば、お桂は疊紙を啓きて、嬉しからぬ春の支度も兄のやら、小僧のやら、色々溜りたる仕事を取出しては見れど、例の頭重く、心結ばれて針の運も大義なり。強いて務むれば、直に根盡きて、慵げに櫻の障子を啓けば、猫の額ほどなる庭も有繁に未枯の色、庇間を洩来る日影に一株の裏吾淋しう咲初めし傍に、宗太郎が縁日にて求めし山茶花の、根や附かで、半開の一輪散際待たて洞み行く哀さの、我自身の上に寄されて漫悲しき四邊の静なるにつけて、世間の忙しさは囂々と手に取る如く、煤掃の音、餅搗の響、町には車の轟、喇叭の聲、物賣の太鼓の音も聞えて、折から大小柱曆賣來年の御重寶、と聲高に店頭を呼び過ぎぬ。

聞と併くお桂は胸なき剝らるゝやうに覺えて、此上に又一歳迎らねばならぬとは、唉！嫌なことかな、と情無き涙溢る時、お桂へと呼ばれて、あいへと走出れば、店頭に一輛の車を停めて、懲勤に兄と授受する丸詰の女あり。誰ぞと見れば己が朋輩娘の菴物屋のお清持つて生れし不客色に遠くて、未だ此頃まで我と併しき萬年新造にてありけるが、少時見ぬ間に思も寄らぬ内義扮の勿躊躇らしう、御機嫌宜しう御在りまするか。私も先月始交番前の升屋と謂ふ砂糖屋へ片附しまして、其や是やで太い御無沙汰、御變も御在りませぬか、未だ何へも御出でなされませぬか。所天はかねぐ、御兄様とは御相識の由にて、蔭ながら貴方の事も存じてをりかすれば、何卒從前通り御心易う、御閑の折は些と御出で下されませ、と昔ながらに能く喋れど、何處やら以前に變りて容躰振たる口上の憎さ。何時も手拭地の浴衣着て、金棒曳廻りし昔の噉々調子の下作なりしも、ひとの女房となれば怨もお高くなるものか。途次に御無沙汰の御詫とは僞、大方其九齋見せに來たりしに枕に親しくなりて、身に恙無き日とては稀にぞなりける。

### (三)

正月七日夕景より、柳外居に於て都々一糸入運座相催し候付、萬障一掛して交番所前の升屋に參會したる嬉遊連の連中、梅亭苔升を一座の宗匠に、春狐、秋狸の徒二十餘人、中に岸透舍柳といふは銀杏屋宗太郎が表徳なり。花に鳴く鶯、水に住む蛙、此男にも此隱藝ありて、日頃算盤片手の慰に、初手は浮氣で中度は何とやら、一生の道樂を此二十六字に留むれば、所好こそ物の上手に掛調の名人とて、毎の勝負附にも小結を下らす。達者なる割には嘘字の少き所より、今日も名譽の執筆に選まれて、好かぬ女の思差、然りとは難有迷惑と嘆しながらも、三絃の、景のと獨り忙はしげに立廻れり。時刻となれば、宗匠文臺に着きて、題も出でぬ。廳てべ切間近となれども、何とかしけむ三絃は來らず。宗太

郎は清記の筆を控へて、切腹場の判官の未だかくと催促。主の柳外居も故々皆を招きながら、この不躋裁を初舞臺の力彌、他目にも氣毒なるばかり狼狽りて、頬み置きける横町の端唄の師匠の許へ幾度の早打を出しけるに、遽に外されぬ用事起りて出懸けたれば、御氣毒ながらとの斷なり。然れど半は之を目的に參會したる三絃をば、今更抜には爲れず、所爲無さま、宗太郎を呼出して、今宵の始末を打明けたる上、豫々清からも聞及びたるお桂様の三味線、何卒手前の當惑をお助けなさると思召して、今夜披講の間だけ御願ひ申せませぬか、と主が餘義無き頼を辭むやうもなく、左も右もとて妹を呼びに行きぬ。

東風吹くや、然れば名も無草も萌出る春を外に、我身一人を冬に垂籠めてのみあればこそ、恁くは氣も朽ち、胸も結ばるゝなれ。偶には衆中に出て笑ひもし、驟きも爲たらむには沈勝なる心も自ら引立ちて、躰の爲にも良からむ、と宗太郎が強つての勧誘に、お桂は進まぬ心を勵まして、卒然ば亂れたる髪を撫附け、糸纏の袖にフランセルを重ねて、米珠の書き羽織に海老茶の短紐、心地勝れぬ身にも例の化粧は忘れず。喩はや野分の後の女郎花、久しき惱に鬱れながらも仍露けき姿の妖嬈と、そんじよそれ者の風情あり。

青葉に交る花の一輪、座中の目は言合はせたるやうに我にのみ注ぎて、眞面に照附くる燈火も眩き宗匠の次席に、お桂は曠がましくも、三昧線膝にして待間程無く開巻となれば、聲自慢の一亭三升が披講にぞ選まれたる。此男俗名を三之助とて、新道に名代の料理屋伊豆勘の息子、門前的小僧は習はぬ經を嫁も持たずしに、今年三十といふに、仍女で食ふ氣の不量見者。唐棟の薄縫入に更紗縮緬の下着を重ね、黒縫子の帶細仕立にして、白琥珀に彩色繪の裏地是見よがしに羽織を脱捨て、一膝動出で、半開の扇を口の邊に翳しつゝ、三光の奥抜一々唄上る調子の少しく甲高なると、異に轉すが可厭ながら、生得ての美音は一座の耳を傾けて、喝采々々。折から宗匠にも急用出來て、宅より迎ひ來りければ、本意無くも今宵は此一順にて切上ぐる事となりぬ。奇亭

薰桶子といふ男が歲旦詠込の寶舟して一日の枕、逢うて嬉しき夢始と謂ふを落巻に、三光、五客まで景品出で散會したる迹には、親しき間の宗太郎と三之助の二人のみ残りしが、此家の花嫁お清が例の大丸囃は、然らず心地勝れぬお桂の氣色に障りて、面白からぬまゝに、頼まれし役目の済ひと與に告別も勿々に立たむとせしを、主夫婦は固より、今宵初見の三之助まで辞を盡して曳留するに、有縛に素氣無くは拂ひかねて躊躇ふを、那様に仰有る事の名、最少し御邪魔して、一緒に歸れどの兄の辭に、今は是非無く舊の座に復れば、はや酒肴出でぬ。

主夫婦も如才なけれど、殊に女に懸けては空無き三之助の勧上手に、お桂は生來の下戸にも似合はず、此男に差さるゝ盃の何とやら受けずには措かれず、同じ酌なれども、此男に注がれし酒は口附ける氣にもなりて、何時か紅梅一枚の微醉、漫漫の涙も覺えざりしを、兄に促されて今更に暇告ぐるが惜しく、心遣して立歸る途次も、何かに附けて三之助の噂。それ氣に障へてや、急に不興氣なる宗太郎の返辞もせざりしが、我家の門を入り際、那男には誰も一寸惚して後悔するのさ。

## (四)

始終墨勝に打沈みたるお桂の、殊に此四五日は頭重く、胸悪く、心地勝れずとて一間に籠りたるまゝ、何思ふとしも無く物思はしげに嘆息洩して、血の所爲にやあらむ。三度の飯も唯膳に向ふばかり、箸探るも懶げに見えるを、不思議や、不斷鹽辛と同一に見るも胸悪しとまで嫌へる升屋のお清の、今朝店頭より一言云遺きて返りけるより、何を喜々變れる舉止のさても、如何なる風や拭ひ行けひ、臚なりける春の月の急に色々へ勝れて見えぬ。穢よ、石鹼よ、と久しく風呂にも入らざりし躰を念入に磨ける間に、永き日脚も傾きて、五時を打つ

と與に、黄昏と咲く夕顔のほのぐと白う塗りし後、やうく夕餉の支度に取懸りぬ。躰て長火鉢の傍に同胞毎の取膳、宗太郎は茶でも氣に入らぬか、常に無く軽然として、苦々しげに妹の姿を眺めて在りしが、嬌飾込むで何處へ？と訊ねぬ。何處へと謂ふて、兄様は三之助様の運座へは御出でなさらぬの？と却て不審の面色にて、是非今夜の三絃をと故々お清様の御使、いづれ兄様も御出なさる事と思うて、私も承知して置いて今更參らでは、先方様へは左も右お清様に済まねば、と辨疎がましき辭を冷に打笑いて、お前が所好で行くものを無理に留めはせぬと、私は止にする、と勿々に箸措きて宗太郎は起ちけり。

今宵に限りて不興氣なる兄の心を酌みかね、日頃は隨分我儘なるお桂も有鑿に出難くて、今更仇なる身刷を口惜しく、獨蒜蘿蔴しながら小僧の膳捲する時、店頭に訪ふ女の聲の聞えぬ。設やと思ひて駆出れば、お、お桂様、貴方の御出が餘り遅い故に案の如くお清が迎に來れるなりけり。最う運座も始まりまして、三之助様を始皆様の甚太い御待兼、御都合好くば直御支度なされまし。宗太郎様貴方も御一緒に、と言ふを機にお桂は二階へ駆上りて、着物を着更へ、鏡臺の前に手早く顔を修して、急遽引返したる店頭に木履を穿きながら、兄様は？と振返れば、唯沮色に頭を掉りたり。過し七草の晩、柳外居にて催せし運座とは太く異りて、人數も主の三之助に升屋の夫婦を合せて、少に七人。宗匠も無く、執筆も無く、文臺の代に酒肴を置きて、一座大分醉も回りたる様子なりしが、お桂の來れるより申譯ばかりに袋廻を一順行ひぬ。判は互撰に、二點以上の唄を詠主自ら唄上げて、三絃はお桂とお清と交替に彈きけり。

風流と亡者の仰は宵のもの、と一同十時を打つを台闇に打連れて歸りけるが、お桂のみは曳留められて、更に放主、領城、領人口とて、誰も曉せられ易きものに昔より言做せよ、媒人の私よりも却て貴方の方が能う御存知の三之助様、假令墨を雪に言拵へて、誰も飛附きさうな旨い事ばかり並べ立てたてて詮無ければ、好きも悪きも打明けての御相談。什麼も三之助様は錢づかひの暴いが瑕なれど、其も獨身の氣儘なる故なり。一度世帶持ちて、世渡の辛身も身に沁みなば、如何に宵越の錢はと江戸子がる男も、自ら懷緊りて、後には女房の髪結錢にまで細い穿鑿、米の價を知りての上の無分別は出來ぬものなり。殊に三之助様も此度坂下に伊豆勘の通り。又私の所のやうに姑小姑の係累は無く、親兄弟の小面倒なるもあらぬ獨身の、年齒も丁度似合しき縁のなり。又私の所のやうに姑小姑の係累は無く、親兄弟の小面倒なるもあらぬ獨身の、年齒も丁度似合しき縁なれば、先方の執心を幸い、お桂様を御遣しなされては如何で御在りまする、と例のお清が薄い唇を翻しての媒妁口。宗太郎は始終苦り切りて左右の返辭も無かりしが、何れにもせよ、當人の了簡を聞いた上あらでは、

## (五)

お桂など振舞はれし後、やうく告別したるは十一時近く、夜更けて女の獨行は物騒なれば、と故々提燈点けて御氣毒な辭れども肯かぬに是非無く、女中に送られて我家に歸れば、店ははや戸闇固く鎖れたり。毎も我の歸るまでは潜口も其まゝに、小僧を寐かしても待受けて在る兄の、訝しさは今宵の早寐。我を閉出さう心か、然りとては強顏爲方を恨の拳に力入りて、思はず手暴に打叩けば、不意に内より戸を引啓けて、騒々しいではないか、自分の所好で晚くまで遊むで來ながら、と笑懶貪に窘むる宗太郎の息は、例にも無く熟柿のやうに臭かりき。

と曖昧にして其場を濁さむとするを、此方は透さず、それではお桂様へ御承知なれば、貴方には御違存は御在りせぬかと問詰められて、他目にも當惑の色は見えたけり。他人の私が要らぬ御世話なれど、お桂様も二十を越して、可惜御容色を持腐にお爲せ申すは御可哀相では御在りませぬか、と口數多きは日頃の癖格別意有りての辭にもあらねど、宗太郎は何と邪推してやら思はず屹と目を瞪りしが、邊に色を變へて、二十を越さうと越すまいと、他人の貴方に御指圖は受けませぬ。

けんもほろゝの挨拶に、お清も艶然と玄て還りし迹に、宗太郎は身動もせで深く物思ふ氣色なりしが、旋て便所に行かむとする襖の蔭に妹の立姿、最前より爰に一部始終を立聞せしなるべし。涙含める目もて怨めしげに見返りしが、其まゝ顔見らるゝを厭ふが如く、お桂と呼べと聞えぬ風して、慌忙しく駆上る階子段の足音は暴かりき。宗太郎も妹の不機嫌なる理由は察して、獨切なげに其後影をば見送りつ。何時まで經てとも下來る氣勢は無くて、午砲間近になれど仍午餉の支度にも懸らざるに、今は捨措かれず、是非無く一階に昇りて見れば、額の邊まで搔巻引被きて、深く寝入りたるやうに打臥したり。お桂へと呼べども、答の無きに枕頭に行きて搔巻に手を懸けむとする時、始めて身を動かせしが、其儘衝と向面に寐返りけり。

此胸氣なる所爲を宗太郎は怒らむともせず、却て腫物などに觸るものゝ如く、又例の仰起して、私が意地悪くお前の縁談を邪魔するやうに勘違ひしてくれては窮る。什麼も二之助様は男振も好し、才覺もあり、萬事に拔目無くて、天晴亭主に持つて恥かしからぬ男。殊に今日此頃のお前の舉止、私も知らずで無ければ、此方から無理に頼むでも添はせて與りたいものを、況て前方から那様に人橋架けての申込、一返辞で嫁らして遣りたけれど、と切無き顔を打背けつ。

## (六)

今更事新う言ふまでも無けれど、お前も私も世に在る効無き穢多の同胞！御維新前までは夜盜、野臥よりも卑められて、人間並の交際さへも出來ざりし身上なり。今でこう四姓の中に加へられて、人並に平民の籍には入りながら、未だ世間では新の字を附けて、依然人間の仲間では無いやうな待遇。それは未矣の事なれど、一生御恩は忘れませぬの、死なば諸共の、と如何にも堅さうな口を利いた奴までが、新平民と聞くが最期忽ち白い目して、傍へ寄るも身の汚辱、辭交すも外聞を惡がりての愛想盡し。現にお前も知る通り、私は此十年許の間に前後七度の縁談、或は纏懸けて急に先方の氣の變るもあり、或は益濟むでから苦情の起るもあり、或は言諍一發爲ざりしもの、不意に遁出すもありしが、いづれも新平民といふのが破談の原因なり。然れば一度は同じ哀の穢多仲間より妻はむかとも思ひしが、恁ては旋て出來なむ子の、いづれ又同じやうに新平よ、穢多よと疎まれて、一生修羅を燃すが不便さに、此様な神佛にまで見放されたる因果の血統を世に遺すまいと覺悟して、世間から退者に爲るれば爲れよ、人にも附合はず、附合うてもらはず、却つて一生獨身の心安く、持つて生れし壽命を一日も早く送越して、昨日も無ければ明日も無く、唯其日を夢のやうに暮せば可い、と此二三年脱然と諦めて退けた。

痴呆か、不具か、切めては容色でも悪からうあら、未だ諦めも付かうなれど、因果か、果報か、強ら私が肉親の怨目でもなく、他人の目にも十人並勝れて見ゆるお前の容穢多で無くば、新平で無くば、随分仕合な所へ縁もあるらうものを、可哀や！三十近くなるに身も固まらず、可惜容色の衰へ行くを、傍に見る此兄が心の中は如何様など想ふぞ！殊にお前が年中體々と躰の良からぬのも、日倍に面の光澤の失行くのも、皆青春を獨身で居る

所爲と醫者も云はる。噫！人の力で稱ふものならば、私の命を縮めても、其忌はしい穢多の二字をお前の體から取除けて、一日も早く好い亭主を持たせたい日頃の念願。固より今度の縁談に不承知な理は無く、又支度の要る事ならば、此身上残らず拂いても嫁らして遣りたけれど、情無いかなし。お前は人並の交際恵はぬ穢多の娘。廣い世界に唯一人の、女房に來人も無き哀なる新平民の妹なり。今こそ何も知らざれ、互の談縛よりて、いよ／＼與る、娶るの間際になれば、先方も、いつ一生の大禮なれば、一應此方の血統から素性、身元まで細に穿鑿するは定なり。然るほどに日輪の限無く照し給ふ下に、髪毛一條たゞ隠すむとするは誤にて、此二十年不足の間に、芝、麻布、京橋、麹町と七八所も替へられど、何所にても少しく尻の暖まる頃には、誰言ふと無く隠せる素性を四隣に知られて、例の口毒く沙汰せらるゝが幸さについとは是まで一所に三年と住着さし例無く、萍の所定めず漂ふにても、實にや障子に目ある世は、何時かは人に知らるゝものを、況てそれからそれへと穿鑿せられて、怎で素性の知られずに済むべきや。又此忌はしき素性を知られて、怎で此縁談の縛まるべきや。當人は左もあれ、怎で身内の者の黙つて通すべきや。未遂げぬは目に見えたれば、慙ひお前を喜ばせて、祝言間近のいよ／＼に又破談の憂目を見せうよりはと思ひ、且は恥づべき血統を用無きに洗はるゝが可厭さに、私も領きたい首掉つて、お清様の折角の親切も無にし、お前の落膽も知りつゝ辞つたが過失か。

嗟乎！同じ人間に生を享けあがら、何の因果で恁る口惜しい恥かしい、生効も無い、情無い目に遭ふ事か。人は生れながらに恁る忌はしい穢の身に有るものか。あはれ此世に於て何一つ業を作りし覺無き身を、何とて世間は恁も強顔く苛むやら。設前世の罪業故とならば、其まゝ前世に如何様とも苦難を更けて説明けうものを、慙ひ此人界に曝して、罪も業も一切忘れて覺無き身を然りとては非道の神や！佛や！切めて臘氣なりとも前世の科を知るならば、又何とか觀念の爲やうも有るべきに。子として親を恨むは勿體なけれど、生中恨る因

(七)

然らぬだに戀は若駒の勇み易きものなるに、小猫も狂ふ春の眞中を轡に責められ、轡に繫がれて、久しく徒のみ心を霞む野に走らせし舉句の、一度手綱を放るれば、山も見ず、水も見ず、我身をさへ忘れ果て、眞一文字お桂は今年二十六の春まで、然こそとのみ夢にさへ憧れし男の味を、茲に始めて覺えたる歎手は折紙附の三之助、女に懸けては正宗の研味、高が世間知らずの處女を悦ばずは七輪の火に水を溶かすより容易く、那も恁も心のまゝを狂ひ行くも理なるべし。

ならぬやうに爲向くれば、此甘味骨肉に沁みて、只管渴きに渴ける吭を鳴らしつゝ、見苦しきまで熱上りしお桂は、目も昧れ、心も眩みて、命も是の爲には惜からず思へり。

然れば鹿を追ふ獵夫の獲物にのみ心奪られて、あの血統を顧る遑無く、理迫たる兄の誠も耳には入らで、却て我身の縁談妬ましさの邪魔立と僻みて、一生を獨身なぞ、は可厭な、可厭な、可厭な事かな！兄様のやうに誰も嫁に來人が無ければ是非もなけれど、私には三様と謂ふ歴とした人の有るものと、今更其を捨てゝ、是までにさへ飽々したる萬年娘に又此後も何十年、喰へば亭主の有るに飾落すよりも愚なり。縦合や穢多の娘の風呂に出でし不在を窺ひ、羽織のみ着更へて男の許へと遁行さけり。

二三日お桂様を御預り申しまする、と翌朝三之助より一言の辭ありけるまゝ、幾度小僧を遣りしかゞ妹の歸らぬに、宗太郎の腹立は一方ならず。蒜にして其夜も睡られぬまゝに飛起き、飲めもせぬ暴酒を鯨飲くれば、心倍激して、憎きは妹め！因果は同じ哀の身と思へばこそ、憂も愁も己が事に斟酌けて、不斷有らむ限の興涙を濺ぎやれる其情を思は、一生獨身と定めし我心の傷ましさとも推して、少しは氣毒とも思ふべきに。然りとは心無きお桂め、我への憚も無く獨面白うに男狂するさへあるに、世界に唯孤獨の兄を捨てゝ、男の傍へ遁行くなど、は薄情にも程は有れ、畜生め！如何して與れう、と切歎をしつゝ再び枕に就しが、夜毎に床を並べし姿の在らぬに何となく物足らぬやうな心地して、何時までも眠就かれず。脳は酒に亂れて、捕捉難き妄念雲の如く湧出る中に、怪しくも己が一生の妻など寐奪られしやうなる心地して、妬さ、腹立しさの堪へ難く、眞恚の焰は胸を煽りて、我にもわらで家を飛出し、物狂はしき心の闇を走りて、程遠からぬ坂下の伊豆勘

### の出店を叩きしめ。

日頃より多くは口數利かぬ男の、有繫に言ひたき事の數々も大方胸に納めて、今朝より度々小僧を出しまして御返し下さらぬ故、手前が迎に参りました。さあ、何卒妹を御出しなされて、と言ふ宗太郎の血相尋常ならず。殊に今宵は奇しく酒氣さへ帶びて、われ思切りたる事も爲かねまじき氣色を心許無く、猶に小鳥を迂闊と三之助も手放しかねて、今夜は大分晩くもあれば、明日朝早く御送り申して、詳しい御談も其折にと賺せ上げられませぬ。はい、何と仰つても恆ひませぬ。縱令や彼が参らうと申しましても此兄が不承知、と真赤になりて悍立つも酒の上、と駄好く遇ひて、如何なお桂は出さりけり。宗太郎は愈辭を盡して迫りしかば、御談も何も聞くには及びませぬ。大方お桂を女房にと仰有るので御在りませうなれど、彼は仔細あつて、遂には聞くも懊惱げに空嘯きて取合はざるに、此方は最急込む胸を強いて抑へて、殊更嘲ける如き冷なる笑を含み、貴方は何も御存知無い故、女房に與れの何のと仰有るなれど、私等同胞は新平で御在んすぐ、血統の汚たれ穢多で御在んす！さあ、それでも貴方はお桂を御曳止めなされまするか、と脣面も無く身の恥を打明して、其はと呆る、三之助の顔を然もこそと見遣りつゝ、心地快げに高笑する様正氣の沙汰とは見えざりけり。

裏より襖の蔭に胸躍らせつゝ、始終の様子と立聞くお桂は、餘りなる兄の爲方の腹立たしさに、我を忘れて衝と驅出でしが、矢庭に宗太郎の膝に取着き、餘りなく、兄様も餘りで御在んす！と身を顛して泣伏したり。何方が餘りな後で解る事、さあ、世話やかせずと直歸れ。さあ、お桂と肩に懸けたる兄の手を振りて、歸りませぬ、歸るは否で御在んす！強つて連れて行かうとなれば、寧ろ殺していく、と前後も忘れて狂氣の如く身を悶へぬ。

三之助は穢多と聞きしより遠に様子變りて、此中にも獨思案の腕組して在たりしが、旋て涙に正体無きお桂を宥めて次の間に連行き、餘り兄様の云ふ言に逆うては後來の不爲なれば、左も右今夜は一應歸つて見たらば甚麼もの？其内に改めて此方から人を出して、屹と貰受けずには置かぬ程にと言ふ。始は承引く氣色も無かりしかど、辭巧に種々賺されて、お桂も遂に其氣になりけむ、眞で御在んすか。那麼巧い言仰有つて萬一御見捨てなるが最期、私は、私は生きては居ませぬぞえ、と氣遣はしげに見舉れば、今更捨てるの捨てぬのと、未だ此男の實意が知れぬのか。さあ、涙拭いたりと言ふ聲して。

## (八)

年齒は長れども有繫生娘の初心なり。人の情は石に宿れる朝露の、淡く、僂く、消易るものとも知らず、己が切なる戀の身も焼くばかりなるに比べて、人も恁ぞと一圖に思定めて、過し三之助が別の一言を便に辛くも飛立つ心を抑へつゝ、面白からぬ我家に辛抱して、待つ身は永き日の傍と鳥影にまで鼠嗜所有人寄の呪も効無く、約束の使は未矣習との便もあらざりけり。さては少しく苦になりて、萬一と思ふ心の發らぬにしもあらざれど、三様に限りてはと毎も自ら打消しつ。然れど又男心は、と絶へぬ物思に唯假初の鬱憂病は嵩じて、遂には七情常無く、寒氣、痙攣、神經痛を發し、知覺所々痲痺して、歇私的里球の壓上をさへ覺えけるに、醫者は生殖器病の反射的作用と、精神の感動より發りし歇私的里と診斷せり。

傍さ一時の妬より、強ひて抱取り來りし花の次第に散り懸るを見ては、固より憎からぬ妹の今更不便になりて、宗太郎は夜の目も寐ずに眞心籠めたる介抱にも、怨は釋けやらぬお桂の、兄の顔見るも苦々しく、辞懸けて口を開かず。薬さへ兄の手より薦むるは、眉を顰めて唇も附けざるを情無く、宗太郎は人知れず男泣に泣きも哀なり。お清も餘りの體に呆れながら、眞に御瘦せなされた事は、と後の辞は無かりしに、お桂は眞と其面を自成りて、何やら言出でひとしては躊躇ふ氣色なりしが、あの三之助様は？と思切りて訊ぬれば、お清は業々しく顔を皺めて、彼人にも眞に愛相盡しでござんす。前頃も是非貴方をどの頼ゆる、私も御宅へ一二度其御相談に上りましたなれど、今思へば、那時御談が纏らないで好い仕合、此四五日前、隣の吳服屋の御内義と駆落しまして、と聞くよりお桂は色を變へて、え！と乗出せしが、あの三様が？と言ひも訖りで仰反りたり。

## (九)

楠の根のそれならぬぞ、三之助の心は我と併しく時経るまゝに彌堅く、縱令や一年半歳達はねばとて、互の間に微塵の變はあるまじ、とお桂は娘氣の一筋に思凝めては疑はざりしに、あるべき事か！主ある女と駆落と聞くより、人一倍に熱せたる身の、宛然奈落の底に突落されし如く、然らでも戀は闇の心倍昧みて、世に在る効

も涙のみ盡さざりけり。妬ましに一度は憎くも思ひし宗太郎も、懲れば今更に不便の勝りて、一入真心を籠めての介抱、日頃お桂が信仰の清正公にまで、密に平憲の願をぞ懸けゝる。信心の功力か、醫藥の驗か、左にも右にも宗太郎が丹精の効わりて、お桂は次第に舊の躰に復りぬ。やうく心も靜まるど與に、如何に思斷ちけむ、三之助の名は再び憶にも出さずなりて、那程大切にせし紀念の指環さへ何方へやら棄遣りて、さしもの戀も病中の一夢と覺果てたる如くなりける。今まで思はざりける兄の親切も自らやうく解りて、人の心は梢の花の移ひ易きを思ふにつけ、何時も變らぬは親肉の情、廣い世間に賴もしとは實にく兄を唯一人！

病後の疲に見苦しきまで薄くなりける髪も、旋て艶かに、お桂は相も變らぬ島田鬚の娘裝なれど、是に懲りてや、夢か戀は固より、再び夫を持たむとは思はざりき。宗太郎も亦女房の欲しさうなる顔もせで、互の睦じさは夫婦かと疑はるゝばかりなるより、何事もよくは云はぬ世間の根も無き浮名か、否か、誰言ふとしも無へ銀杏屋の同胞夫婦と沙汰せられて、通の小町湯、角の浮世床、遍く町内に此呼喧しければ、是や血統の汚を吹聴せらるゝより一倍愁く、或夜窮に世帶道具を二車に纏めて、遁ぐるが如く塙末の唯在る裏町へ移轉りぬ。屋號のみは何とやら取變へしが、變らぬは煙草の小賣商、今も仍獨身の兄妹唯二人暮なり。其後宗太郎は日増に沈勝なるに引更へて、お桂は鬱々病み事の絶えて無くなりければ、却て顔の光澤良く、肉緊りて姿一際見好げに、晩櫻一枝今も春方と匂ひけるが、爰に一つ合點行かぬに乳首の色、腹の形も次第に異し、と風呂にて見し近所の女房等が陰言。抑誰が種にやあるらむ、あさまし。



(上)

年の市に騒ぎ立て居る大通りから、一二町は入りこむだ横町に、二三軒建並んだ下宿屋の軒の洋燈が、幽かに夕月夜の薄くらがりを照して、向ふの河岸から、うそ寒い夜風がそよーと吹いて来る八時過、さも暖かそうなショオルを耳までかぶつて『オ、寒い晚だ』と急き足に行き過る女を、不平そうに見送つて『あれでナイ寒いのだもの』と、小聲に呟いたのは即ち己れだ。

お芳さんの、イヤサお芳のショオルも鳥度あんなのだつた、イヤまだ良かつた様だ、何でも七兩も出してと云つて、繼母に非常に小言を喰たと云たつて、夫も一月程前まではあつたが……、ア、彼女も氣の毒だ、此寒空に碌に火もない處で、水も汲み、飯も炊き、其暇に足袋縫の内職とは、實に氣の毒だ、今頃は昔の事を思ひ出して泣て居るだらうか、イヤ矢張一生懸命に足袋を縫て居るだらう、己が昔の事を云ひ出すと、モウ歸らぬ事は云ふな、又良い事もあるだらうと云つて當時も愚痴をかへり、決して泣たり何かして居る氣遣はない、今朝もモウ三十出來たら持て行て歸に己のシャツを買って來ようと云て居つたから……、何故彼女はあゝあきらめが良いのだらう、己は男の癖に昔の事ばかり始終思ひ出して居るに、チットも愚痴をこぼさぬのが實に妙